



<http://www.scout-ib.net/>

◆ スカウトのニーズをプログラム活動へ

晴れ晴れとした新春を加盟員の皆さんと迎えることができたことをたいへん嬉しく思います。

昨年は、能登半島の先端、石川県珠洲市「りふれっしゅ村鉢ヶ崎」にて開催された第17回日本スカウトジャンボリーでは、県連盟より270余名のスカウト・指導者・大会スタッフが参加し、灼熱の太陽の下、スカウトはたいへんエネルギーに活動しましたが、大きく体調を崩すこともなく、大会を楽しむことができました。また、本大会は、初めて原隊のままでの参加が可能となり、「2級スカウト以上」という縛りがなくなったため、参加のためのレベル低下による大会ではと混乱が危惧されましたが、参加隊指導者やベンチャースカウトの頑張りにより、大過なく無事に大会を終えることができました。

また、昨年、たいへん残念なことに山田 隆士 連盟長が急逝されました。5月に開催されました年次総会にはお元気な姿を見せていたのがつい昨日のように思い出されます。連盟長は、各種の研修や県連事業の基礎・基盤を作り、その中心的な役割を果たし、その功績は計り知れないものがあります。心よりのご冥福をお祈りいたします。

さて、今年は第24回世界スカウトジャンボリーの年、アメリカ合衆国ウエ

ストバージニア州サミット・ベクテル保護区で開催され、県連盟としては40名のスカウト・指導者・ISTの参加を予定していますが、参加するスカウトが所期の目的を達成するため厚い支援をしてまいります。また、大会参加につきましては、イギリスにて開催された第21回世界スカウトジャンボリー以降、県連盟内より参加するスカウトが増加し、隊編成についても県連盟を中心とした編成が可能となっています。この機会を捉え、世界スカウトジャンボリー大会への参加を身近で取り組みがいのあるスカウト個人々の目標とし、スカウト活動へのモチベーションを高めるための取り組みとしてまいりたいと考えます。

一方、県連盟は戦後間もない1951(昭和26)年5月に創立(再興)してから、2021年度には創立70周年の節目の年を迎えます。本年度は、創立70周年に向けた3ヶ年計画の初年度と位置づけ、県連盟の更なる発展と充実のための諸施策を計画し、県連盟が一体となって実践を開始する年といたします。特に、長年にわたる加盟登録人員の減少に対する対応については、組織の拡大・充実を図るため「スカウトのニーズをプログラム活動へ」をスローガンに掲げ「野外を中心としたプログラム」を実施することを重点においた活動を推進し



てまいります。スカウトが何を考え、何を欲しているかを的確にとらえ、現代にマッチし、かつボーイスカウト運動の主旨に沿った魅力あるプログラムをスカウトに提供し、また、スカウト自身がそれを自主的、そして積極的に実施展開できるようにするために、指導者一人ひとりがその課題と向き合い、スカウトに指導・支援できる力を身に付けていることが必要であります。その指導者を支援する指導者研修、ラウンドテーブルや団訪問なども更に充実させてまいります。

また、今年は、いきいき茨城ゆめ国体・大会への奉仕という大きなチャンスを得ました。このチャンスがいただけた意味を良く考え、全力で取り組むと共に、県連盟の発展と充実に繋げてまいります。

県連盟にとって、厳しい環境は続くものと思いますが、加盟員の皆さんの弥栄を祈念いたしまして年頭の所感といたします。

◆ ボーイスカウトの制服 それを着る「意味」

一目でボーイスカウトとわかる制服(ユニフォーム)、どうしてスカウトは制服を着るのでしょうか。それは、次の意味があるからです。

- スカウトであるというあかし。
- 世界中のスカウトが、同じ「ちかい」をたて「おきて」を守る兄弟として、仲間意識を体感するため。
- 野外を主とした活動で、活発に活動できるようにするため。
- ユニフォームを清潔に正しく着用すること、すなわち記章や標章を正しい位置につけ、身だしなみのよさや自尊心を養うこと。
- 社会のスカウト運動に対する信頼を高めるため。

です。

また、スカウトのユニフォームには、どこの国であっても世界スカウト記章をつけます。これは、「ちかい」をたてて、スカウト一人ひとりが世界のスカウト仲間に加わったこと、スカウトとしてお互いに「ちかい」と「おきて」を守って友情を深めることを示しています。そうす uniform、「uni」=ひとつの「form」=形・姿勢なのです。

自分が一員である地域社会、支えてくれている人々、自分の果たすべき役割、自分が常に努力して社会の役に立つ準備を着々と進めていること、積極的に建設的に役割を果たそうとするスカウトの精神がそこに表れています。

スカウトや指導者がスマートにユニフォームを着こなし、快活に活動する姿や秩序ある行動や動作により、一般の人々からスカウト運動に信頼と好感が持たれるように、「友情」「自信」「信頼」の象徴となるユニフォームに大いに誇りを持ち、正しく着用するようにしましょう。

なお、「ユニフォームを来ているときだけがスカウトではない」と言われるように、ユニフォームを着ているときと同じ気持ちで自然に身に付き、スカウトらしい行動をいつもとれるようになることを期待しています。

● 記章と標章の意味とつけ方

スカウトの制服には、どの国のスカウトであっても「世界スカウト記章」がついています。これは「ちかい(やくそく)」をたてて世界のスカウトの仲間になったこと、そしてスカウト一人ひとりが「おきて

(カブ隊のさだめ)」を守って友情を深めることを示しています。カブ以上の新制服には、右のポケットの上に縫い付けてあります。

また、制服につけられた各種の記章や標章は、自分の所属する地域、団、隊、役務、進歩の状況、取得した技能、参加した大会などが一目でわかります。自分が一員である地域社会、支えてくれている人々、自分の果たすべき役割、自分が努力して社会の役にたつ準備を着々と進めていること、積極的に建設的な役割を果たそうとしているスカウトの精神がそこに表れています。

「記章」はその人がどの区分のどの位置づけにあるのかを表し、「標章」はその人の所属を表しています。

制服と同様に、記章や標章も日本連盟が定め、加盟員のみがそれを着用することが認められています。また、制服につけられる記章・標章と位置は、教育規程によって細かく定められています。

きちんと正しく着けましょう。

● 半袖の制服の下に長袖を着ること

最近、寒くなるとよく見かけるのが、半袖の制服の下に長袖のシャツを着ている姿です。世の中の流行なのでしょう。スカウトにも指導者にもそれが見られません。そして、セレモニーの時は下のシャツの袖を捲って制服の半袖の中に納めています・・・ってことは、基本的には「良くない」ってわかっているのでしょうか。制服の下に長袖シャツ・・・これっていかがなものでしょうか。

基準の守り手であるコミッショナーに伺ったところ、これは「No」であるとのこと。スマートネスです。半袖の制服を着るときは、袖口からシャツが出ないよう半袖のシャツもしくは袖のないシャツを下に着てください。寒いときには、防寒着を制服の上に着るのが基本です。ただ例外としては、長袖の制服を着る場合は、当然のことですが、長袖の下着を着てもかまいません。制服着用のルール、是非お守りください。

余談ですが、昭和の頃のボーイスカウトは(古い話で申し訳ありませんが)、スカウトは長袖でした。夏場は袖を捲ることで対応していました。教育規程には「上着は、長袖も着用することができる」とありま



す。つまり、半袖が主なんだよ、ということでしょう。いつ頃から半袖が標準になったのでしょうか。振り返ってみると、私が指導者になった昭和50年代には、WB研修所に入所するには「半袖の制服を着用すること」となっていたような・・・気がしません。

●「見た目」も大切なんですよ!!

今の制服の素材は、綿とポリエステル混紡ですので、シワになりにくいのですが、以前のものは綿100%であったためシワシワになりやすく、制服を長時間着る場合には気を遣いました。気をつけないととてもだらしく見えたりもしました。着心地はよかったです・・・。

昨年8月を以て、全員が新制服に移行完了しましたので、皆さんの制服は、まだ新しいです。ですので普通に着ていれば、だらしく映ることはないでしょう。もし、だらしく見るとしたら、それは着方ということになります。

ボーイスカウトのイメージは、ぱりっとした制服を着て、自律ができているという薫る存在、輝く存在というイメージでしょう。以下は「人を集める技術（古谷真一郎著。アチーブメント出版）」という本に書かれている一節です。紹介します。

見た目には2つあります。個人の見た目と団体としての見られ方です。

個人の見た目（中略）は、体のサイズに

あっているか、汚れやシワはないか、常に気をつけること。靴も同様に、色あせや汚れがないような、常に磨きあげておくことです。つまり身だしなみに気をつけているかということです。

身だしなみに対して意識を高く持つことは、思った以上に周りへ大きな影響を与えます。人間はより美しいもの、清潔感のあるもの、あたらしいものに、自然と心惹かれます。（略）ヨレヨレのスーツを着た、ぼさぼさ頭の冴えない印象の人から「今度、うちの団体のイベントに来ませんか？」と声をかけられても、とても付いて行く気にはなれません。しかし、パリッとしたスーツを着た、見栄えの良い紳士から誘われたら、行ってみようという気になるでしょう。（中略）

2つ目は団体としての見られ方です。ボーイスカウトには「スマートネス」というキーワードがあります。これは動作や行動がスマートであること、もちろん制服の着こなしの良さも意味します。ボタンが外れていないか、記章が正しく付いているか、常に気を配ることを重視しています。

ボーイスカウトは、全員がまとまって同じ制服を着こなすから、団体としての見られ方がとても良くなるのです。制服をきて、テキパキと働いているお兄さんやお姉さんを見て、小さな子どもは「自分もあんなりたい!」、親御さんは「わが子もこうなってほしい!」と思うのです。

記章が付いていたり、付いていなかったり、ボタンが外れていたり・・・と、スカウトそれぞれが違う着こなしをしていたり、だらしく着ていては、統率がとれていない印象になる上、全くカッコ良くありません。そんなボーイスカウトに子どもを入れたいと親は思うわないでしょう。・・・です。あらためてボーイスカウトであることの意味を考えてみましょう。

【連盟歌】

♪ 花は薫るよ 花の香に
日は輝くよ 日の光り
我らに名誉の 重きあり
薫るか 光るか ああ名誉

眼開きて 見きわめよ
耳そばだてて ききただせ
われらに不断の準備あり
手足に 心に ああ準備

(意味)

花には自ら発する香りがあるからこそ 花であり、さらに美しく在ります
太陽には自ら放つ光があるからこそ 太陽であり、輝く存在になるのです
スカウトも同様に、一人ひとりが名誉を保つために行動するからこそ、スカウトであることができるのです
薫る存在、輝く存在であるスカウト、それは名誉によりもたらされるのです



◆ 団委員・指導者の皆さん「ちーやん夜話集」を読もう！

皆さんは、「ちーやん」という人をご存知でしょうか？ 日本のスカウティング界では有名な「中村 知」氏のことである。

ちーやんは、本名を「中村 知（なかむら さとる）」と言い、名前の「知」からちーやんと敬愛を込めて呼ばれています。

ちょっと略歴を。

明治 26 年に愛媛県松山で誕生。大正 11 年京都大学文学部史学科卒。大正 12 年大阪府立高津中学校教諭に就任し、昭和 14 年まで高津中学ボーイスカウト（高津中学校健児団）団長。その間、昭和 4

年渡英、第 3 回世界ジャンボリーに参加、ギルウェル実修所を修了した。昭和 14 年少年団日本連盟教務部長、昭和 16 年大日本青少年団錬成局少年部長を経て、昭和 25 年ボーイスカウト日本連盟那須野営場長、昭和 30 年ボーイスカウト日本連盟奉仕部長などを歴任し、昭和 47 年逝去。享年 79 歳。

・・・です。その功績は下記に記します。

さて、このタイミングで「ちーやん夜話集」に触れたのは、理事長の年頭所感にもあるように、茨城県連盟の発展と充

実には、まずスカウティングのココロをしっかりと理解することが大切で、それには「ちーやん夜話集」を読むことが最も近道？と考えたからです。

ちーやん夜話集は、県連ホームページの資料センター⇨ライブラリーにあります。この機会に是非とも読んでみてください。

半世紀前に書かれたモノですが、スカウティングとは何ぞやを明確に示してくれます。そして、今でも我々に強烈なパンチを浴びさせてくれます。

盟友 中村 知 の後世にのこしたものは（ちーやん夜話集より）

ベーデン-パウエル卿が英国で、ボーイスカウトを始めたのは、今から 55 年前の事である。その頃、日本の文部大臣は牧野伸顕で、よく英書を読む人だったので、すぐこれを知り、その進んだ青少年の社会教育法に目をつけた。それで、時の広島高師（今の広島大学）の校長の北条時敬が、英国に道德会議の代表として出張するにあたり、この調査をもあわせて依頼した。北条はこの前年に英国で発足したこの教育訓練を見て感心し、その文献や用具類を揃えて持ち帰ったが、その直後内閣が変わったので、文部省では、折角のこのよき材料をもてあまし、これを北条に渡した。

そこで北条は、彼の校長をしていた広島高師の附属中学校の生徒にこれを伝え、6 個隊を作ってボーイスカウトのような訓練を試みたのであったが、たまたまその一つの城東団という隊の中に、わが中村 知 少年がいたのであった。彼は子供心にこの野外生活の訓練に大きな魅力を感じ、恩師北条の精神指導にうたれた。そしてこれが彼をして、一生この運動に心身を捧げしめるに到ったのである。

中村知はその後拓大を卒業し、さらに京大で東洋史学を専攻し、大阪府立高津中学（現高津高校）に教鞭を執った。

その頃、わが国にも、少年団運動が起こった。大正 3 年頃、京都には中野忠八が、まず少年団を作ってこの ベーデンのボーイスカウト式の訓練をはじめたのに、彼もおおいに興味を感じて、中野とも親しく交わり、連絡もあって、彼の高津中学の生徒の中の希望者を集めてボーイスカウトを作り、彼はその隊長として、スカウトの訓練を実施した。

大正 11 年には、少年団日本連盟（第 1 代総長、後藤新平）が結成されたので、彼は喜んで他の同志とともにこの傘下にはいり、特に佐野常羽に師事した。この佐野は、英国で親しくベーデンの知遇を得て教えを受け、またボーイスカウトの訓練の本山ともいふべき、ギルウェル実修所に学んで来た人で、大正 14 年には、富士の山中湖畔で、日本ではじめての指導者実修所を開いた。彼は勇んでその第一期生となって修行し、佐野の人格指導に傾倒した。その後彼は佐野にも愛され、ずっと彼の教え

を受け、1929 年には英国で世界ジャンボリーが開かれたので、佐野に従って渡英して参加、続いてギルウェル実修所にも学んだ。それで彼は、自信を得、ますますこの道に精進し、一方に高津中学ボーイスカウトの実際指導をしたり、大阪連盟の改造にあたり、一方では佐野に従ってますますこの道の指導者養成面の指導と研究に没頭した。

彼には少年指導に必要なユーモアがある。それでなかなか話題をまいたものだが、その一つを紹介すると、世界ジャンボリーへ行った時、豪雨がきてキャンプの道がドロドロになったので、彼は日本からゲームのためにもって来た竹馬に乗って悠々かっ歩いて、世界の少年達を驚かせたが、佐野からは、その茶目つけを叱られたそう。また、彼は詩と音楽を勉強して、沢山のよいスカウト・ソングを作詞、作曲した。どれも、彼の体験からほとぼしり出たもので、スカウト気分がよくあふれた曲だが、その中にはなかなかのユーモアのきいたものもあって、少年達に愛唱されている。

戦後、わがスカウト運動が再建されるや、指導面に円熟した彼は、本部の専従指導者となって実際指導を行い、那須の常設野営場長を 5 年務めたが、その間に不幸眼底出血で倒れた。それでもう荒行はできなくなったが、その不自由な眼で、彼は天眼鏡を使って、ベーデンの” SCOUTING FOR BOYS”などの宝典を次々と訳出して、日本スカウト道にバイブル的な光を与えた。もう一つ彼の高津時代の隊員達は、今になって皆立派に成長し、あるいは能力ある外交官、学者、技師長などになって活躍しているが、その中の数人は、また現在の日本スカウト運動の最有力な中堅人物となっている。われわれは、「弟子を自分より偉くつくる」ことを誇りとしているが、彼こそ身を持ってその範を示した男である。

第一代後藤総長は「金を残したり、仕事を残したりするより、人を残して一生を終わるこそ上の上たるもの」といわれたが、彼こそこの言葉を実行して一生を飾る人である。

昭和 37 年 7 月記

総長 三島 通陽

IB-GP レポート (第4地区)

去る9月24日(月)つくば市吾妻小学校体育館において第1回4地区IBグランプリが開催されました。当日の天気予報だと曇り時々雨でしたが、お天気も上上、盛り上げに一役買ってくれました。

実行委員は8:00から集合し、会場準備。守谷第一団のCS、BVS隊長2名に指導を受けながらレースコースの組み立てを行いました。どうか、準備が完了し、スカウトたちの顔がワクワク、ドキドキの中、いよいよ、セレモニーが開催されました。県内初のGP開催と言うこともあり、杉浦県副コミッショナーにも来ていただいてあいさつをもらい華やかに始まりました。

担当の配置は、車検1名、スタート位置1名、記録1名、インタビュアー1名、実況1名、ゴール位置3名の合計8名を配置し、ビーバースカウト、カブスカウトも、平等に練習走行で自分の車の様子を見て、調整する者は調整し、調整後に予選、予選は3人1組でタイムを競い1位のみが決勝レースに勝ち残れるルールにしました。調整後の走りを見るために練習コースもあり、予選前に何度も走らせているスカウトもいたので予選前に壊れないかどうか心配になるほどでした。

練習走行で、タイヤが外れたり、コースアウトしたり、ゴールまでたどり着けなかったりの車もありましたが、どうにか、調整できるところは調整し、予選レースに臨みました。予選レースは、全員、一人一人に苦勞したこと、レースにかける意気込みなどをインタビュー形式で皆の前で話してもらい、車検を受けて、スタートグリッドに並べ、レースに臨む3人は、ゴールで自分の車を見守り、F1テーマ曲の中、石岡3団の関根隊長の軽やかな実況に否応なしに盛り上がり、第一レーススタート。ゴールまで行けなかった車が2台、ちゃんとゴールした車が1台。ちょっと、残念な第一レースで始まりました。ビーバースカウトは、12名の参加で、4レース実施し、決勝は、2名ずつで行われ、タイムで順位が決まりました。

次に、カブスカウトのレースが始まりました。やはり、カブスカウトになるとスピードも増して、レースカーの格好もかっこよかったり、可愛かったりと洗練された感じがしました。3台が3台ともゴールする様は、なんとも言えない高揚感が会場内を包み一層の盛り上がりを見せていました。カブスカウトは、42名の参加で、14レース実施し、決勝は、14人で競われました。4地区最速のタイムは、3.51"でした。

レースが終わり、全員のレースカーは、展示台に並び、昼食を挟んで、デザイン賞の順位を決める投票を行いました。会場にいる参加者全員で投票を実施し、デザインでよかった車の順位を決めました。グランプリの3位まで、デザイン賞の3位までの表彰式を行い、それぞれ、1位はトロフィーと賞状、金メダル。2位は賞状と銀メダル。3位は賞状と銅メダルを平澤地区委員長より受け取りました。セレモニーで平澤地区委員長の講評をもらい、次回開催を願いながら解散しました。

◆大会スタッフから

初めての取り組みで、まずは、6月の大和の森でレースカー試作に参加させてもらったことがIBグランプリのイメージにつながり初めてのイベントでしたが、比較的スムーズに大会を運営までこぎつけられて一因だと思いました。

また、4地区のベテランの委員の皆さんがアイデア豊富で、2回の打合せで本番のレースを開催できたことは、他の地区の話聞く限りは奇跡に近いと感じました。本当に4地区のプログラム委員、地区コミッショナー、事務局に感謝です。当日のことですが、始まる直前まで、練習走行と予選レースの走る組は同じと考えていましたが、顔見知りのCS隊長らから「それでは、予選結果が見えてしまうのでかわいそう。」と言われ、それは、最もと思い、急遽、予定変更し、練習走行は並び順で実行した。このことも、結果的に、



レースを盛り上げた一因でありました。

◆参加スカウトから

- IBグランプリは楽しかった。今度はカーブのコースも入れてほしい。他の人が走らせている時に自分の車の空気の抵抗を考えていて、真ん中のコースがいいか端がいいか考えた。今度はもう少し工夫したいので、また絶対やりたい。
- 予選のタイムより、決勝のタイムが下がってしまったので、くやしかった。またやりたい。今度はデザインもがんばりたい。
- 作るのも、走らせるのも楽しかった。

◆保護者から

- 久しぶりに子どもと一緒に夢中になって工作した感じがした。重さが重い方が早くなるだろうと思いき重さオーバーにならない程度に重しをつけたことが結果的に良かった。
- 旦那様にこれだけは作ってとお願いして、子供と作ってもらった。イヤイヤ始めている感じでしたが、後半は、本人よりも旦那様の方が夢中になって作っていた。
- 当日行ってみると、コースも本格的でびっくりした。レースカーも親子で相談しながら作成し楽しめた。ありがとうございました。
- 夏休みだったので一緒にレースカーを仕上げていきました。やっていくうちに私の方が夢中になってしまいました。レースも一緒に見学させてもらいましたが、みんな楽しそうでした。今度は大人のレースも是非やってほしいです。期待しています。

◆隊指導者から

- スカウト達が本番をととても楽しみにしていました。当日ちゃんと走れるか、早いタイムが出るかドキドキワクワクして、レースを見つめる目が真剣で輝いていたのが印象的でした。スカウトもリーダーも保護者もとても楽しい1日でした。コースやキットの準備等は本当に大変だったと思います。有難うございました。



IB-GP レポート (第1地区)

10月21日開催の第一地区スカウトフェスティバルのプログラムの一つとしてIBグランプリ第1地区大会が盛大に開催されました。

第1地区の5個団が参加し、参加車両51台でBVSグループ、CSグループ、BS含む一般グループの3つに分けて競技を実施しました。

大会はグループごとのトーナメント方式で実施しました。DJ担当の北茨城1団の熊田リーダーの英語と日本語の紹介&実況中継で盛り上がりました。F1レースのBGMが流れる中、スカウトも興奮して大盛況の大会となりました。各グループの上位3名を表彰しました。さらに、デザイン賞も設定、表彰してスカウトたちの力作・レースカーをみんなで見ました。

大会終了後、フリー対戦の時間を設けたことが好評でした。対戦できなかった相手や、表彰された上位のスカウトと対戦したり、BVS対CS、BVS対BS、親子対戦なども実現したりして楽しい1日となりました。

多くのスカウトたちが、次の開催・対戦を夢見て帰路に着いて行きました。

◆参加スカウトから

- 10月の21日に行われたスカウトフェスティバルの午後のメインイベントのIBグランプリに出場して僕は惜しくも3位で、お父さんは堂々の1位となりました。練習では僕のほうが速かったけれど本番では3位になってしまい、親子で1位と2位を取ることができませんでした。2位を取れなかった理由として考えられるのは、タイヤが車体に当たってしまい、減速してしまったからだと思います。次回は優勝目指して頑張りたいです。
- ぼくは、組集会で木をのこぎりで切ったり、ねん土をつけたりして赤色のスポーツカーを作りました。工夫したところは、スピードを出すためにねん土をタイヤの裏にもつけて重くしたこと、フロントをヤスリでけずって60度くらいの所から25度くらいに急に変わるコースでもスピードが落ちにくくなるようにしたこと。その結果1回戦は勝ちました。すごくうれしかったです。でも2回戦では少しの差で負けてしまいました。バランスを考えたりして一生けんめい作ったのでよかったです。友達の車を見ると、デザインがカッコいいスポーツカーや、食べ物形の面白い車など色々ありました。
- 車作り、大変な所もあったけど、やすりをかけて磨いたり色塗り楽しかったです。レースで

は、1位がとれなくて悔しかったけどゴールまでちゃんと走ったのでよかったです。

◆指導者から

- 茨城県連盟に注文した、IBグランプリの木のパーツがとどいた時、私たちは「これをどうすれば速く走るだろう」と考えました。レースをやるからには、手に汗握る勝負にしたい。四角い木っ端を削ったり、屋根を乗せたりとあれこれ想像しても速く走る形は分かりません。ならば実験してみるしかない。実際に車を作り屋根の位置を変え、重心を工夫してみてもそんなにスピードは変わりません。それならば、スカウト達には自由に作ってもらおう、自分で好きなように作った方がきっと楽しい。勝負することよりも自主性をとりました。

製作当日は晴れのち曇り、物置小屋の中の作業です。まずはどんな車を作るかたくさんイメージを膨らませますがこれがなかなか決まりません。リーダーたちとあれこれ相談し、考えて考えて、やっと鉛筆で木の材料に線を引いていきます。形が決まれば後は速い。

リーダーと協力しながら木を削ったり、のこぎりで切った木っ端を屋根として乗せたりしました。ライトや羽根までも付け、やっと白木の車が出来上がりました。形ができてスカウト達も少々満足な様子。次はアクリル絵の具で塗っていきます。色がつくことでより一層個性が発揮され、思い思いの車が完成しました。出来上がったらもう走らせるしかない。にわかには板ばちで傾斜を作り、自分達だけのレースの開催です。

レースという勝負で勝てるよう努力することも大切ですが、今回のように与えられたパーツを使い、自由な発想で形作っていくということは成長していく過程でとても貴重な経験になったと思います。

- 大会スタッフとして、コースの組み立てとスタート係を主に担当しました。初めにコースですが各部品には、組み立てやすく番号と印が付けてあり初心者でも要領がわかれば確に組み立てが出来るようになっていました。様々個所に工夫と苦勞の跡が見られ素人から見ても完成度の高いコースだったと思います。

そして、GP本戦では、この大会のために選曲されたBGMが流れる中、大会を盛り上げるアナウンスの合図で3台の車が一齐にスタートを切る様相は、上から真直で見ると興



奮の域に達していました。スタート前に車のタイヤの具合を確認したり脱輪が懸念される車は真ん中のレーンにするなど思考することも多く1時間以上に及び熱戦に緊張の途切れる間もなく周りの雰囲気を含め終始歓喜の声で埋まっていました。次の開催に団としての意欲を燃やします。

◆保護者から

- IBグランプリは競技用車両キットで参加しましたが、車両に関してこだわったのは、摩擦抵抗・走行直進性です。車両の形状は当団の助川リーダーのご助力で単なる四角の木片から「車」へと生まれ変わりました。当初は車両にフィギュアを装飾しましたが「出場するからには勝つ!」の意気込みで、コースは平坦距離が長いことから重力加速度重視から摩擦低減のため、すべて取り払い軽量化しボディペイントのみとしました。また、車両キットには元々車軸スリーブ装着溝が掘ってありましたが、微妙にシャーシに対して平行に彫られていなかったため、平行になるように調整しました。最後に車軸に潤滑剤を塗布して完成です。家での試験走行では息子の車に負けていましたが、本番では勝ったので父親の威厳は保たれたかな?と一安心でした。
- IBグランプリはとても楽しかったです。ただ子供には木材が固かったです。色塗り装飾は楽しめました。負けて悔しいので、またやりたいそうです。
- 娘が1人で作るには難しい感じですが、親子で一緒に作れて楽しかったです。またそれぞれの車のデザインを見たり、レースではみんなと一緒にワイワイとでき、とっても楽しい時間でした。



IB-GP レポート (第5地区)

○実施日：平成30年11月18日(日)

○実施場所：土浦市青少年の家 講堂

○実施概要：

平成29年度の県カブ・ビーバラーリーが悪天候のため中止になったことから、地区内のカブ隊、ビーバー隊リーダーから、せっかく準備したプログラムが各団にあるのだから、地区としてカブ・ビーバラーリーをやりたい、とラウンドテーブルや地区協議会で要望が出されました。

それでは、ということで平成30年の地区事業に入れることにし、県連でIBグランプリなることをやる、とホームページにアップされたので、一緒に行おうと軽い考えで計画をスタートしたのが経緯です。

実施主体は地区プログラム委員会ということで実施時期が近くなってからプログラム委員会を3度ほど行き、シミュレーションを重ねるほどIBグランプリの所要時間など、大変な問題があることに気づき始めました。

最も困ったことは、レース全体の時間が読めないことでした。

県連プログラム委員会の場で他地区のIBグランプリ実施スケジュールを聞き、実施済みの地区から少しずつ情報が入り、計画の見直しを行っていきました。

その結果、カブ・ビーバラーリーの途中ではあ

るが、時間帯を分けてビーバー部門はビーバーだけ、カブ部門はカブだけを全員集めて、午前中に各部門の予選トーナメントを行い、午後からそれぞれの部門の決勝トーナメントを行うことにしました。

また、レギュレーション(車検)用キットが、寸法がばらばら過ぎて使い物にならず、重量のみとしたとの情報で、地区内で当該車検用キットを調整し車検受付に臨みました。

当日の動きとしては

1. カブ・ビーバラーリー全体受け付け後、車検受付に各スカウトが車両を持ち込み車検を受け、合格した車両にゼッケンを発行。このとき同じ団のスカウト同士が当たらないようゼッケン番号をランダム発行しました。
2. 車検合格した車両をスタッフが受け取り、トーナメント出走順に並べて実際のレース時間の短縮を図りました。

実際のエントリー数はビーバー部門で32台、カブ部門で51台の出走となりました。

A部門のエントリーは5台でエキシビションとしてレース展開、午後のビーバー、カブ部門決勝のあと「やってみたいよね!」ということでビーバー部門、カブ部門、A部門優勝車両3台でどれが一番早いか、のテストマッチを行いました。



結果は・・・大人気なく? A部門の勝ち、という結果になりました。

司会者の話術のおかげもあり大変盛り上がったIBグランプリが出来ました。

スタッフの皆さんの臨機応変の対応、活躍のおかげでなんとかやりきることが出来、さすがはボーイスカウトのリーダー、と改めて思い直した一日でした。

スタッフの皆さん、引率リーダーの皆さん、ありがとうございました。



SC-IB Newsletter

SC-IB (Scouting Ibaraki) Newsletter 2019年1月号 通算18号

2019(平成31)年1月発行

発行 日本ボーイスカウト茨城県連盟事務局

〒310-0034 水戸市緑町1-1-18 茨城県立青少年会館3F

※ SC-IB Newsletter は、2～3ヶ月ごとに不定期で発行しています。

※ SCOUTING 茨城に掲載されている写真・文章等は著作権法等により保護されています。著作権者に無断の複写・転載は堅くお断りいたします。